

「小さなカナヘビ」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

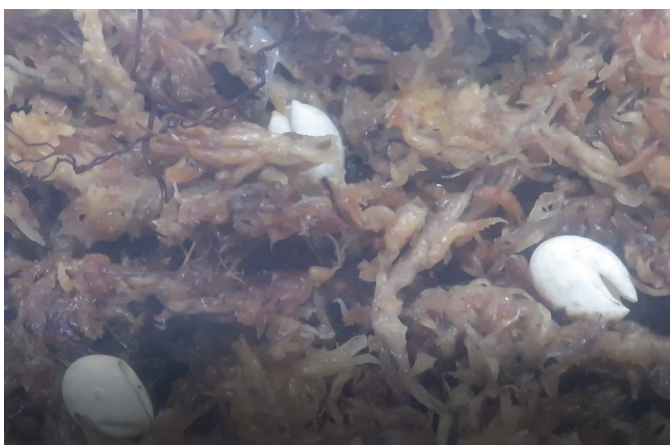
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

1年生の子どもが、「カナヘビの赤ちゃん」を持ってきた。実は「カナヘビの赤ちゃん」という言い方は誤っている。「赤ちゃん」はもともと、ヒトの新生児や乳児のみを指す語である。広げたとしても哺乳類の子どもに限られるべきで、私は「バッタの赤ちゃん」「ザリガニの赤ちゃん」という用例は決して使わないようにしている。(NHKは平気で使っているが・・・)



それはともかく、この「提出物」はすばらしい。もともとは、大学探検の時に、カナヘビの親を見つけて、自宅に持ち帰ったのが始まりだ。その後、卵を3個産み孵化したので、しばらく飼育していたのだが、飼えなくなって学校に持ってきたという。



確かに卵の殻が3個、ミズゴケの間に転がっている。私はカナヘビの卵を初めて見たので、少し感激した。孵化直前には、卵が膨らむ様子も見られたという。



卵の大きさは長径が15mm程度。鳥類の卵とちがって軟質(革質)の殻なので、かけらはなく、そのままの形を保っている。



そもそもこれが「カナヘビ」(ニホンカナヘビ?)の幼体なのか、私には同定できない。陸生の卵と体つきから「は虫類だろう」という程度である。



しかし、狭い容器の中でも活発に動き回っている。時折舌を出して、周囲の様子も伺っている。下は先端が二つに割れていて、やはりは虫類には違いない。私は両生類やは虫類が、やや(かなり)苦手なので、2組の担任に持ち帰ってもらった。ははは。